特別
マ6
9304
A 3

特 Z6
9304
A3

明治三十四年一月

延葛集 第壱号

異風となり、
夫れ極端の情況に為す業態
変情切迫の状態と云ふも之れ
風の作家も時に成功を得る所
以を知らざる能はざるも宜く然れども
全く之れ詩者の天性と云ふに止まる
ものと云ふべく其何人為らんを知
らざるなり。

失ふ彼岩の走馬（うこと）
さふ 横田千歳

三月の月次郎吉の性行　筑水生

三月は近頃好評を博したる小説なり其文章脚色
等の敢きて不既るゆやムや偉士の細評あり〳〵れば記る
八主人公次郎吉の性行を汲りて脚の思へつけるを
此べく新と云ふ八一つは其主人公お近頃の群遊中自
ら一種の異風を悔へたること二つは浮薄の好著述と感
じたれば今

青鬼の解釈

者と云ふ故せり此れば次客とは稍きを動け陣きを挫く
知れず誠に我性偏なり世でたることは非ずして筆を虚
為に絵の泡勇を磨く者は此美なり。　徳川時代の
て放矢と云へば脚力の上の板群なるは四海此外なる同

然り俠客のうちまも天一坊の如き欺騙者混淆せるやも計られず然れども天一坊は俠客にはあらざるべし

巣猫に心の強さを持つと聞けば猛虎の如く強き者を恐れ弱きを侮るも良くけら

月中に告ぐ潮の干満は月の引く所なりと思ふ者多し月は有形なれども無形なりと云ふ

笑四と雷又は笑窪とあり

を記憶せしめ上

みて使ひ分せば一層

なるべしなれども此處に用ひられたる言葉

感の情味を弱者に全感あるの情陥らざるべし

らず此笑を初て満座中の不動山事五郎は誤つて悪しき才の弱者を全感

せ戻りたる俠客に次郎吉は立ち上りて善根

次郎吉は極て保ゴ厳しく感ぜざる所は勇ましき点より大額を振上げて

よりも寧ろ喪らき点あり

弁り反つたる風采なる若衆の次郎吉は

幼兒の如く苦

枕手枕にきて怪く

北宮勘八事め

を祝賀するも方便

なりとの次郎吉の言葉を

悪声発ずば必ず之を

変じ俗言流すと大名の行列を遮て

士を對手の脚をくきし二百字余の大名なるもの八百八藩の祖元なるあり

俗らくれんとの意気込る加へて義を感ずれば非人元

食を除を庶めて三尺の小説なれども

ヨシと云つて年を競争つけて告場で点上せんとする

傷きし心は胃ゴの自ら省みて直ならざれば視覚を

も惜ふざらんやと言へば大男は仰天

郎吉を評せしめたらんは次の

あれを常に事の異変を清けをはめ十一歳の女

童を對して傷きし振舞

特貴は最も張く弁して

とかれり兄の酒井若俠客の前に出でたる驕慢なる

次郎吉と寛行の初めて出なる事なれば次郎吉とも
懇ろに何ぞと同角（次七四の）貧苦に奉行嫁を
懇てさせ逆恨とも（？）めたるも時代の深と（？）秋
一枚無の雨迄も（？）晴れされ一番の砕くるを泣迫情、斬
る次郎吉が苦悩者にて八淡脈と評する六未
ど次郎吉が式四軍仕ちゃ之愛ちゃ情感の深のし
ことを知らぬ故なり若し此者ひあつき特質ある
りせば不部山吉郎とのぞ学ばんへ共身山は
土七人の様元なる町家の嬢風を無本を御ちをして立
を切殺し五右衛門の心股を買へ白狐甲
光の義侠を奪へ剛敵吉五郎を股下
是脱せしめ最後の漂年若特にして特嘆置

渠治郎吉と相次樵質の如し吉し渠ら好もとまろに吹らしめい渠終せ日蔭に居て日向と貧にはこの如き人物なるべし而して此樵質を渠ら性質談自軍純なるいも因るとにらむ渠生凡得て勇と軽人に絶く而して此勇と軽人と次樵質性支歌せるすると つたとても現金を引請に命やらむと言ふ事なれば大角の如し治郎吉熊の如し

く能はざらしめ、達者なして愛情出ひ秋ぐらしむ
いれも同様なれば達らるを剛勇なるを為あらざる新する
一倫の母心懸結して容易外の外に動の出るうるを誠心
外の頃にて義と二節操とあり之れかへて意思の
懐硬赤山の様なるの様なるなれば思想と行ふと
概ね一様なるの様なるなれば思想と行ふと
されば次郎吉は同情の勇気なる妻りの用ふることなく弱
者を助くるの剛漫無なるを敢ひ（？）この性質の外を以て出
でるの我勇山の手伸と云ひ不部山の慢心を溺み田原
大角の無道を怒るの如き時ならざるのみ見よ大角
を憐むまと心魂を溺せしも此の三義の幼兒に対する
優さしさを、時見れ潔白なる特質の妙然なるの

し所以なるべしやされど次郎吉を以て未だ完全な
る剛者と八謂ふべからず自然の流りを遂げずして或多
の禍難を来せし八其罪他なるにあらずして故あり八君
絶對的の大侠客(斯の者ありとせバ)を以て次郎吉子
に比する時ハ其差ハならざる只念ハ義に過度の実、
行ふありしあらんの賊ならば進んで鼠小僧へハ捧て
侠客の一つとハこれ八善きも貫ずあらバ此金何時
までも世事と敵らより相ひぬきに振舞ハ皆此
疾きり物語の奇端となりし飛鳥山の事件ハ丸分な
知れども爰など所大限過度の行ひなりしなり
しの真緑田保屋敷の場のかきも昔より我国人の風き
なれてせしもむなちからなれども大勇者そし

勿論く善し善悪有勝
次治郎吉ならむ子孫浪
六拾ふに録短目於いて
、幸ならし退くに
斯る魂潔にして難癖なる最
上の趣味を合せるとまだならる
ごけれバ其辯損なれるを
ふわにたも達意を要まる
ことなり」
最初之漂の仕事と果ら
岩に働きよりげが自須
隠居子測の死を遂げし
頃より境遇大に変れる
の五箇思想あるが如く
見ゆるに至れるものならむ
實者の詞に治郎の物に当
れる時の有様を云ふにや
平常と異なるやうな評なれ
ハ全くものし甚に思ひぬ

七八気への撥揮なりし此等の事件ハ一歩く日と共に伴
しを遂ぐ他を逃げざるを得ざらしめたり伴しながら大恩
なき斬ある撥揮を有ちて元始めて次郎吉の次郎吉た
る以所まて存し保て中正を守らさしめんの專終に消
極めのグヅくして止まんのみ況てや第(四の)侠客
の武士に自ら手出しせざるなかれき(第十四の)大事場
の縁きの働きのぬきく後年ならで謹慎の見なるべき
ものなるを捨てをや然らバ次郎吉ハ所謂侠客中の
偉なる者この
寛永が流儀を評して(此者ハ至て激烈の性にて、いくじ炎
の中に小事の騒迷なるめぬき者)なりと云ゑり次郎吉
ハさまで激烈の性とハ謂われざれど亦温和なる添付き

たる性のあるべし作者次郎長の人体を設て苦
みを盡して眼鏡き面魂しに肩怒らせて一寸と
身を立てそこに云ひ又母密の妻と物言ふ時ハ〈キリ〉
と摩げ〈〉肩怒らせ〈〉云ひ云ひ〈〉ものの口を抑へ〈〉俗に敵の
對する時ハ平然として大量あるの極きに及ぶまで田舎の
出敬のさまぶるまで表面ハ大量を装へど内心ハ
ナヘ油断せず眼光の鋭元を持て抑へつゝ云てとめり
又秀也郎の初めて其俗住居を訪ふ所
お蘭也面して已れハ大量なるも眼らんと試みられど
逆ふ数たる脳を抑へて飛出さんぬき皆是
れ気象の色えを立居る次所まるでも作者ハ類な
次郎吉の此性質のさま。ことを設けど不当の於次郎吉

と表も爭で隠れざるの次郎吉の第二回の芸妓を賊と誤
るのおきれ者恐らく八重の姉と者を心の余り所行
業とて不〈〉ものあらんの（何とあれバ作者ハ常の
其不意無端者を賞て也まぎれバなり）若し此事
詞を有り〈〉爭坂を也バ意一絶えず実為作を後みる
きと身るまを今の油断なりしかり不図起り事
作あらんの詞の大意あるを者とてハ少しく不當の事のも
兎も角作者の武勇談の作者めきたる面目の筆法
を用ひ〈〉ハ遺憾千万
もて余て書らん〈〉と呼べどる三十八の今まで買ふまて
たまく〈〉の善き客のごのきごと思ひ〈〉も水の泡（者云て
始めて悟つたり出ハ易く化ハ難〈〉と）新の気象の

義侠男子の最後の決意を所為へこと肝要なり
因幡藩の諸士計を頼り深謀遠慮の上今決心
なり次郎吉を取りて八州廻りの内ゆゆしき
働き御奉公の憂慮ハ日頃の存じ寄せこと
可又最後の晴業因事既に佐倉十万石を買取
えと欲るなれ流せしものゝ家人の驚やおのまとゆへ
ハ流石の大事を取りて次郎の生命を賭る要す無事の落
着を計りしのゝ此の身を置へ二ことより憐みを要す
故に此度の槍を仕ぐるを為りぬ前きに八郎若三次を決
今亦小事の決を決ふ事の起りハ飛脚山清吉の
様子起る世の中のさてゞ取とす因人を殺したる
界ハ元来偽さしき次郎吉の魂抜して寄るふり苦

闘絶倒せり。相模八郎右衛門の家来若殿甲次郎
吉光の刀剣なり始つり時早くも西井家の番頭と
隙想いつきたれば（ムヽと考込みて八無道の佐倉藩、界
屈の強元御者を其侍るさしおのこと一つ八別者のさ
て白二つ不因人の仕敵なり保て暫一後の大事と将
さまねもあり之とある心底八西井義綱の面前まて日頃ま
仕合ゞ会釈をのゝ俄の生命の時くり、此ぬ事八
平の御免と言へ〜ものなりたり知るの為なく佐倉
の無道強元の無暴御奉行要〜て来りゞの厳刑なり
の秀吉注の内幕さ〜治まりて公私所を用く済みれ
バ今とて八世の悪習ことの親これバ我国八成多無
為の界作り火鉄りせぬ表てだちたる界さへなれバ

今ぞ最後の年運、朝拝していと、逆旅浮世の
者ゝ送られて天下の大死が四肢ゆて笑ゆてこれハ眠り
けり

絶て後年四季の味歌のこと必後の次郎共が行ゆ前年ゝ歌
て寄ゆき相達ゆり更ゆ大ゆる変化ハ造物熟商
ゆり果れ消ゆ、ゆゆ人生最後の四日、後ゝ指ゆ在さ
せじとの悲念もありなるあらんが流み来り流み去て
四顧すれバ単簡ゆ比著述所謂欧客とゆ者の余
傳の遺式ゆを合ゆ為ゆるのめ

頃孫大和家の給掖

大和姫と申奉るハ其初め春良の御代ゆ七ひ出玉ハ平安の朝
ゆ宮仕ゆ出給ひていと華やゆゆる世の御覚えゆりしゆ程ゆ
く唐文の大臣と申て外国のやんごとなきゆ聖君とハ定め玉
ひ、御ゆうらひゆるゆ程ゆ敬ゆ、しうバ鎌倉殿
徳川公の御時ゆハ勝れて賢き伝達姫君をも数多く生ま
せ給ひゆり、もと大和姫ハ国ゆる優ゆる御文頃の上ゆ女性の
御徳として家の内のこと必ゆも言ゆ及ゆ当づゆつけて物細や
ゆ行きとゆり和ひ、大臣の御文ゆ、感敬仁徳自然ゆ備
ゆ玉ひ、このバ天下の政事備ゆる栄大臣の文ゆる定りたる栄
華のきゆどゆ誠ゆめゆたうりゆる明ゆれバ明次の御代、時世
自らうつろひて唐文の大臣の御覚え何はとハゆく衰へゆら

久あるに其頃又西の宮の大臣とて勝れて賢き御方ありけり
世の政治、上の御覧えもめでたく今の世に此人無くてやとまで
ぞおぼゆめる、されば唐文の大臣物するもあらでけなされ玉
ひて大和姫との御あつらひさへはのがれ難き世の浮雲
津なる事痛く御心を悩ぬ玉ひつゝ世も今は乱れすりとて密
に位を去りて奉ら清和四る君の御を慕ひ奉りと
宮の姫君もいと本意なき事なりとて快からず深宮
の中る籠こもり玉ひぬる程る西の宮の大臣部日の賞御
勢ひあれば彼の奉る数多き下部の中に世なるまぢき
振舞ども仕出るも多かりければ大臣も殊の外ねづらい
きことなおぼゆ玉ふ大和姫なりつづける若き人この中に此折

こそ人と為る大臣に従ふ人とを置り能のうめければ素より
志の確なる人とは大臣なる姫君をたゝへたる者
日に増れば其頃世の中を憂る姫君を追従する者
又見えぬ人ありきに何故なるやらん姫君に不心
得のかどありとて折と女房たちを誡め玉へとなん
程に唐文の大臣に従ふ人とは世も再び君の恵を蒙る折
とぞ思ふを見せまし世の中を厭ひ捨てる思ひの外な
数多の因を得て何の障碍なくとて為に成
勢を除の大臣に誹り立てけり、さるにても唐文の大臣
は如何なるおぼゆ寄りけん異なる御気色もなくて我れ既に
道を絶て寄ることなく唐我臣の脈は永久此国に残
るのみ今は退位の外何の目的あらんやと深手とての給へ

つる御情に見兼て人知れず涙を流して百歳を二と生き
存りと聞えて世ハまぐ明治の御代に立て一家を興く
べき筈なる御後嗣さへ無きに世ハ三家未だ定まらの人と
云言也が主君をば力落せんと心ゆくものゝうち御代長久の
明治をば祈と云ふ中なる振舞も有り新て八世の為
なる也何あらんと姫君を初め奥方迄も密に眉をひそめ
知ぬ人有りがたき御志に涙こぼれきれば心深き御方に八孰
れも新なる水証を御心に留められ所詮八大和唐文西
家の今日の勢ひも浅くハ績くまじ然る唐文の大臣八
御齢も既に傾斜せられ再び世に出ぬ御家老さへ更
に無ければ夫ぞ八留言の大任を姫君に合せ奉り此大

臣をば陸君とかしづき奉りて新この御所勢をも偽
らるゝ世の取沙汰今ハまちゝ有とつゝ此事也

成行くものなり

嵯峨の屋主人に望む

嵯峨の屋主人――一度八江都の花に「国民の友」に名を知られ
なる主人足下近頃蝶著の節尚志ある方なりあく君八
論人なるも愛せらるゝ小説家何人も博されぬ文人なり
博されぬ八未ぐ嫉妬を起さんほどの働き積んでなるぬ
も因元の愛せらるゝ八君の使命なる故で宇宙主義
平等差別、不神の信不信、余の文人の新なる言を真なるは
言へ共吾人可歎く博く思へど独り君の声八愛ら

しき為のやうなる風なれば畢竟心底を打明けて伴ふべき
親実の男子なれば「初恋」の達者の多数なる可愛がられ
しが何故で君が白糸の青き思想より来たりしなる為
山谷川の清き流れ、岸の柳を抱く岸辺、彼の立を憐む者
なんやされど彼人は敢て君を強ふる所なり曰く幼き女兒何
人も立を愛せ何人も立を憐まざれども立を好みて立をして
いまだ濁りを深み男子一外来物の弱き動のさ
れ易し而精を初めて嫌ふ嫌れ国語を面ぜらること
恐めて易し斯の外物の弱き変りを動のさまざまを生れ吾
人可為人子望む所也